【審査論文】

大学初年次英語教育とその課題に関するシステマティックレビュー

辻るりこ

A Systematic Review of First-Year Program for English Learning

TSUJI Ruriko

要旨

本研究は、初年次英語教育における英語の学習に関する研究の特徴とその課題に関してシステマティックレビューをすることを目的とする。本稿では、初年次英語教育の課題（特に学修の段階を明示する方法）や本分野の研究の視点を明らかにすることに焦点を当てて、システマティックレビューを示す。文献の収集方法として、まず研究者の所属している教育機関で使用可能なデータベース三点（CiNii、EBSCO、Science Direct）を用いることを決定した。データベースの使用の際は、以下の検索条件を付けている：①査読ありの学術論文、②全文入手可能、③英語か日本語論文。また、論文がデータベースのキーワード検索では、検出されないことも想定し、ハンドサーチ検索も行う。一連のデータ収集の流れは、PRISMAに基づくシステマティックレビュー検索手順を参考にし、予め決めておいた基準に基づいて文献収集を行う。文献を選択していくにあたっては、初年次英語教育とその評価に関するものであること、先に述べた研究主旨とは異なるもの、他言語や他分野に関するもの、レビュー論文や実践報告は除外している。本稿では、論文を選択していくことにスクリーニングという言葉を用いている。膨大な数の論文がデータベースから検索される為、まずはタイトルとアブストラクトの確認をし、その上で本文の確認を行っている。その本文の内容を基に本調査の対象となるものかを再度検討して最終的な研究論文（論文）を選定している。この際、研究デザインがわかりやすいものであること、そして分析記述が明確であるものを選定している。本分析の結果、初年次英語教育の多くの研究の先行研究は量的な研究が多く、質的な研究がさらに必要であるということや、初年次英語教育の先行研究では、専門分野を持つ大学がその専門分野に関連する語彙の習得に関わるものを研究対象としていたということが明らかになった。

キーワード：初年次英語教育、システマティックレビュー

１．はじめに

本研究では、文献調査を行うにあたり、システマティックレビューという手法を用い、特定の質問に答えることを目的とした。システマティックレビューという言葉は、1990年代から臨床領域において広まってきており、文献調査をある決まった方法で行い、研究者が網羅的に過去の文献を整理することを指す。コクラン共同計画（The Cochrane Collaboration: CC, 1992）ではシステマティックレビューの定義を「ある特定のリサーチクエッションに答えるために、すべての経験的［empirical］エビデンスをあらかじめ

定めた基準で網羅的に収集し、評価し、統合する方法である」と定めている（唐他, 2014, p.190）。今日、システマティックレビューという言葉の定義は様々な形で示されているのが現状だが、「各研究の効果から普遍的な集団（母集団）での効果を推定するために各研究の効果を統合する統計学的手法」（城下・片岡、2021, p.694）という意味を示すメタアナリシスという言葉とは、異なるものと本研究では位置づけている。メタアナリシスは、効果量（エフェクトサイズ）と呼ばれる指標を用いて分析を行うとのことであるが、システマティックレビューは文献の整理を行う際、論文の評価フィルターを設定し、関連する研究の結果を要約する。今回の調査では特に質的に分析を試みる。

特にシステマティックレビューは、レビューの道筋を示すことが重要とされ、そのレビューがどのように行われたのかを明瞭に示すことが必要である。その道筋を示したものが、PRISMAのガイドライン（The PRISMA Group, 2009）であり、本研究ではその文献調査の流れを基に分析を試み、過去10年間に公開された文献を調査の対象とした。また、本文がオンライン上で見られるものに限定している。表１では、各データベースにおけるシステマティックレビューの検索数（2022年8月20日現在）の一覧を示している。

表1　各データベースにおけるシステマティックレビューの検索数（2022年8月20日現在）

データベース名・その他	検索語	検索数
CiNii	「初年次　英語」	53
	「初年次　英語教育」	20
EBSCO	“First-Year Program English”	5
	“First-Year Program EFL”	7
Science Direct	“First-Year Program English”	24
	“First-Year Program EFL”	3
初年次英語教育学会	「初年次　英語」	3
	合計	115

大学での英語教育の取り組みに関する研究は多岐に渡るが、大学の必修英語、さらには高校から大学という高等教育に上がりたての学生を対象とした研究はかなり限定されているのが現状である。しかしながら、小中高で行われてきた英語の学習をどのように高等教育での英語学習に繋げていくのかを議論することは、大学が全入時代といわれている今、重要な課題であり、それは学習者の高等教育機関での英語学習支援へと繋がると筆者は考えている。

2. 研究背景

2.1 大学初年次教育とは

中央教育審議会大学分科会は、「学士課程教育の構築に向けて」において2018年以降、学士課程教育の構築が課題であると明示している。各大学は、「学士」教育の質の向上、教育の充実を図っていく必要があるということから初年次教育の意義は強調されている。さらに今後、日本の大学でより幅広い学習経験を持った学習者、すなわち、社会人学習者や留学生といった人々も大学に入学することを踏まえると、ユニバーサル・アクセスという状態を確保する為に、初年次の教育というのは、今後の大学教育を考える上で重要であると考えられる。

さらに、大学初年次教育については、杉谷（2009）によると2001年、私立大学協会附置私学高等教育研究所の導入教育プロジェクトの調査グループ（以下、私学高等教育研究所・導入教育研究グループ）が

行った私立大学全学部を対象にした「私立大学における1年次教育に関する調査」がある。その調査で初年次教育の実施率は80.9％と高い水準で行われていたが、主に日本語での文献の調べ方やレポートや論文の書き方といったような、スタディスキルズに焦点を当てたものが多かったとのことである。しかしながら、この当時から、その内容、目的、水準、教材、評価に関しての教員間の合意形成が課題であったとされている。さらに私学高等教育研究所・導入教育研究グループの2007年の調査では、97％もの大学が初年次教育を行っていると回答し、そのほとんどがスタディスキルに関するものだった。そこでは、2001年で課題となっていた教員間の合意よりも、どのように初年次以降の学修との接続を行うのか、学生の基本的な生活習慣、学修態度・目標等を含むスチューデントスキルに関すること、教育成果や達成度の客観的評価に関すること等が課題として示されている（杉谷，2009）。こうした初年次教育が定着した背景には、山田（2012）は：①学生の変化、②政策的側面の変化、③社会から求められる教育効果の提示という理由が挙げられると示している。また、2008年には、初年次教育学会が発足し、現在は各大学が置かれた状況に応じて、初年次教育とそれに続く大学教育の質の確保とその向上を図ることが求められていると言える。

藤田（2006）では、その初年次教育の目的を議論するにあたり、リメディアル教育とは、高校で習得しているはずとされた内容のものを大学入学後に補習することとし、初年次教育とは、大学入学後、生徒から大学生に移行させるための教育を指すといったように両者の違いを明らかにしている。ただ、この両者の線引きというのは難しいことも示されている。実際のところ、初年次教育では、リメディアル教育の要素の是非が議論されることがあり、教育現場にはその「初年次教育」の定義の曖昧さがあることは否定できない。

2.2 大学初年次教育における英語教育

各大学が学生の状況に基づき、様々な取り組みを行ってきているが、実際に大学における初年次の英語教育に関しては、特に高大接続についても考える必要がある。高校までに学習してきた内容を持って学生が大学に入学して来ると想定されるが、河合（2016）でも指摘されている通り、「高校教育において不足している点」に対応し、「確かな学力」を身につけさせるということも初年次教育では期待されている。渡邊（2007）では、国立大学法人81大学、公立大学・公立大学法人67大学、私立大学552大学を対象にした、初年次学生対象の教育カリキュラム等に関してのアンケート調査を行っている。その結果、「スタディスキル・アカデミックスキルの増強」、「（英語、数学、理科系科目等の）基礎学力の増強」が特に注視されていることが分かった。

実際の英語教育の分野の研究は、以下のものが挙げられる。例えば、入学前プレイスメントテストに関した研究によると、長谷川（2016）は、5年間のプレイスメントテストで明らかになった学生の英語運用能力のレベル（中学校卒業レベルから高校初級レベル）を比較検討した結果、若干の平均値、中心値の向上は見られたものの、習熟度別クラス編成やカリキュラムを再考しなくてはいけないことについて結論づけている。さらに、初年次英語教育と専門分野の語彙の学習に着目した研究では、医療系総合大学における初年次の医療英語の語彙リスト作成について学術論文からコーパス作成を行うといった研究がなされている（高橋ら，2020）。その結果、5つのグループの語彙リスト分類を行ったが、その優先順位を明らかにしなくてはいけないことや、専門課程での学修に特化した専門語彙の分析は今後も進めていく必要性があることが示唆された。さらに、常葉大学におけるカリキュラム改善プロジェクトの一環として、共通総合科目である初年次英語科目の独自テキスト開発の為の研究が行われている（谷口ら，2020）。そこで

は英語教育の基本的指針の話し合いがなされた上で、トピック候補を挙げ、タスクの名称と内容を整理し、テキスト作成の課題を分析している。その結果、テキスト構築（試作版）は完成したが、音声教材の準備、さらにはオーセンティック（真正）な教材とメディア利用を考え、ウェブサイト上の記事を利用したが、その題材の許諾を得ること等、真正な教材を使うことの課題も明らかになった。このように、入学前のプレイスメントテスト、専門との関連を示したもの、そして初年次の英語教育で使用するテキスト開発に関する研究などの例を示してきたが、実際のところ、英語学習についての教育、特に初年次英語教育に関する研究分野、そしてその具体的な議論というのは多いとはいえない。

そこで、今回、システマティックレビューを通して、どのような視点で英語教育分野の初年次教育がなされているのか、その特徴を探るとともに、その課題を探求することを目的とする。

RQ1: 英語初年次教育における過去の文献の特徴はどのようなものか。

RQ2: 英語初年次教育の課題とはどのようなものなのか。

3. 研究の目的

本研究は大学初年次英語教育の特徴を示した上で、何が課題となっているかを分析・整理することを目的とする。

4. 研究の方法

4.1 データの収集方法

研究方法として、データ源はCiNii、EBSCO、Science Directの3つの主要なデータベースとハンドサーチを用い、研究対象は過去10年間の2012年から2022年までに発表された論文を収集した。

文献の収集方法として、まず研究者の所属している教育機関で使用可能なデータベース三点（CiNii、EBSCO、Science Direct）を用いることを決定した。データベースの使用の際は、以下の検索条件を付けている：① 査読ありの学術論文、② 全文入手可能、③ 英語か日本語論文。また、論文がデータベースのキーワード検索に上がらないことも想定し、ハンドサーチも行う。一連のデータ収集の流れは、PRISMAに基づくシステマティックレビュー検索手順を参考にし、予め決めておいた基準に基づいて文献収集の取捨選択を行う。スクリーニングの基準・除外基準としては、初年次英語教育とその評価に関するものであること、先に述べた研究主旨とは異なるもの、他言語や他分野に関するもの、レビュー論文、実践報告等は除外している。本稿では、論文収集の取捨選択についてはスクリーニングという言葉を用いている。膨大な数の論文がデータベースから検索できる為、まずはタイトルとアブストラクトの確認をし、その上で本文の確認を行っている。その本文の内容を基に本調査の対象となるものかを再度検討をして最終的な研究件数（論文数）を選定している。この際、論文の選定に当たっては、研究デザインが明らかであるもの、そして分析記述が明確であるものを選定している。

さらに、論文の内容をレビューしていくにあたり、各論文の内容にあうキーワードの選定を行った。内容分析については、5段階の方法（舟島，2007）を用いており、その方法は、(1) 研究の問いの決定、(2) 論文整理（データ化）、(3) 暫定版：基礎分析・コーディング ①（4）本分析：再分析・コーディング ②、(5) 信頼性の確認、の段階を経てコーディングを行っている。質的分析において、コーディング分析の方法は多岐に渡るが、比較的分析がしやすいもの、そしてその分析手段の段階が明示的なものを選択している。

また、図 1 は、本稿で示す論文の選定の流れをプリズマ声明（以後PRISMAと示す）に基づくシステマ

ティックレビュー検索手順を参考にして明示している。PRISMAは、システマティックレビューを体系化されたものにする為に、27の確認項目とその手順を示しているものである。

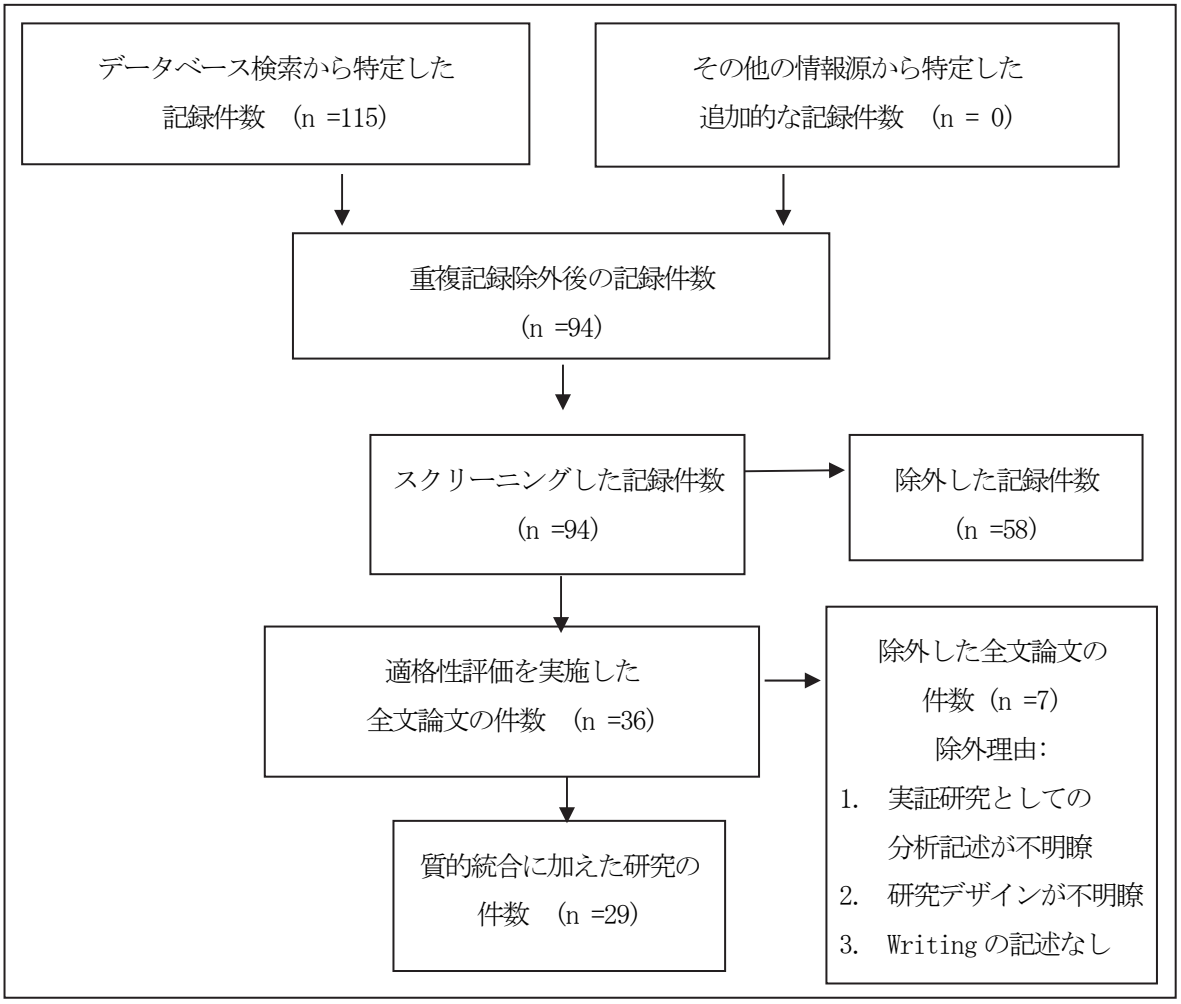

図1　PRISMAに基づくシステマティックレビュー検索手順を参考にした手順

5. 研究結果と考察

5.1 検索結果について（件数）

表2　研究デザインの内訳

研究デザイン	件数
量的研究	28
質的研究	1
混合研究	0
合計	29

検索結果であるが、実際に初年次教育かつ、英語教育に関する研究は多くはないことが分かる。図 1 で示されたように、3種類のデータベースとハンドサーチからは、115件と多くの検索結果が出てきたが、実際に論文のスクリーニングをしていくと、29件になった。表2ではそれら論文の研究デザインがどのような形式なのか、その内訳を示している。表3では、本調査で用いられた研究論文のキーワードを基にした内容分析をまとめた一覧を示している。その中でも、特に量的研究は28件とそのほとんどが量的な研

究であることが分かる。1件は、インタビュー調査を行った質的研究であった。

研究デザインに焦点を当てて分析を試みたところ、量的研究、質的研究の数に大きな違いがあることが明らかになった。高大連携、そして大学の2年次以降の専門教育を行う上で大切な初年次であるが、実際には未開拓の部分が大きいと推測できる。

また、千葉（2016）は質的研究を中心にした報告を行っている。質的研究を行う前に、アンケート調査（量的研究）の中で「実際にラーニングコモンズで受けたい支援はありますか」という質問の回答を学生に求めた。その結果、回答数754件のうち、その65.6％の回答者から、「特にない」という回答を得た。そこでどのような支援が構築できるのか、具体的な学習支援ニーズに関するヒアリングを行う為、質的調査を行ったとのことである。対象学生12名の半構造化面接で得た回答をカテゴリー分析の一つの手法であるSCATを用い質的に分析した結果、学生の課題として、文章構成が不安・苦手であることや、スキル向上に対する動機づけが低いことが挙げられ、さらに学習の中でプレゼンテーションを学生は重視していることが明らかになった。さらに、初年次の学習への戸惑いや、教員からのフィードバック不足といった課題、そして学生自身、他者への相談を躊躇する傾向があるという学習者特性についても明らかになった。初年次英語教育について論じた先行研究は量的なものがほとんどで、質的研究の必要性も明らかになった。

実際、学部全体、大学全体（学部横断型）の初年次英語教育の量的・質的研究をするにあたっては、学生のデータを大量に収集することが必要不可欠で、それには学部全体の教員、そしてその学部運営に携わる職員の方々の協力も重要であると想定できる。

表3　本調査で用いた研究論文のキーワードを基にした内容分析のまとめ

	キーワード	研究一覧	特記事項
研究デザイン	量的研究	稲富・松宮，2022；大門ら，2021；高橋ら，2020；小堀，2020；谷口ら，2020；牧，2019；松宮，2019；和田，2019；岡村・ラッダ，2018；Tahima，2018；甲原・セネック，2017；長谷川，2016；鈴木ら，2016；横山，2016；石川，2016；高橋，2015；横山，2015；渡辺，2013；Tokeshi，2013；清水，2013；加野，2012；井上，2012；大城，2012；和田，2019；宇佐美，2017；Read and Dang，2022；AI M.，2022；Everett *et al.*，2013	
	質的研究	千葉，2016	

5.2 初年次英語教育関連の研究分野の特徴について

初年次英語教育関連の研究分野をキーワードにし、分類をした結果、「語彙学習」「プレイスメントテスト結果分析」「学習者要因」そして「英語技能に関わるもの」「その他」に分けられることが特徴であるということが明らかになった。

はじめに、「語彙学習」に関する初年次英語教育の研究であるが、その多くは、専門分野との関連であった。例えば看護系の大学初年次英語教育に関しては、大学初年次に学生が習得すべき医療や福祉に関わる語句のコーパス分析が行われていた（高橋ら，2020）。その上で、初年次英語学習者の為の語彙リストが作成されている。しかしながら、その語彙リストに関して言えば、派生語等の選別がさらに必要であることがわかった。多くの研究者がコーパス分析に携わっていることからわかる通り、その初年次英語学習の為の語彙リスト作成は課題が多いといえる。看護英語の分野では、さらに工学系の分野においても、専門語彙に関する研究、ESP語彙リスト作成の試みがなされていた（石川，2016）。石川（2016）の研究では、

大学の教科書で出てくる語句をKH Coderを用いて選定している。

次に、「プレイスメントテスト」を用い、初年次学習者の特徴を研究したものも多くみられた（渡辺，2013；井上，2012；長谷川，2016；横山，2015，2016；和田，2019；稲富・松宮，2022；清水，2013）。その中でも、横山（2015，2016）は、入試試験区分によって英語能力に違いがあると結論付けている。大学という様々な教育的背景が異なった学習者が集まったところでは、同じような結果が多くの大学で起こっているというのは容易に推測できる。さらに横断的研究もあり、初年次の学習者の英語能力をラッシュモデルを用いて分析した研究も見受けられた（渡辺, 2013）。このラッシュモデルというのは、難易度が違う項目にどれくらい正答できるのかといった確率を用いた測定方法である。年度による能力比較、そして先行別の英語能力比較を行っている。その他、プレイスメントテストを用いて初年次教育の教育的効果を測る研究が行われていた（横山，2015；井上，2012；長谷川，2016）。

加えて、「学習者要因」に関する研究は、学習者の自己効力感、そして学習動機（岡村・ラッダ，2020）に関するものがあった。松宮（2019）では、初年次における英語学習成績と学習者要因との因果関係を因子分析や重回帰分析等の多変量解析を行い検証していた。また、「自分はある課題に対し、遂行出来る」といったような認知を自己効力感というが、プレイスメントテストと学習者の自己効力感の関係を検証した研究がある。和田（2019）では、プレイスメントテストで示される英語力の違いに関係なく、英語自己効力感が高かった学生は、15週英語授業後英語自己効力感が低くなる一方で、英語自己効力感が低かった学生の英語自己効力感は向上したという結果を示している。英語能力と自己効力感のスコアを高い、低いで分類し、その関係を示した研究であったが、学生の過去の英語学習歴や英語能力の違いに加え、英語自己効力感についても、初年次においては大きく変化する時期といえる。言い換えれば、初年次の英語教育の現場では、英語能力、英語学習経験、学習者要因の違いと様々な違いに対応しなくてはいけない時期でもあり、大学4年間の初めの英語授業をどうするかというのは、4年間の大学教育を考える上で、重要であると筆者は考える。

英語初年次教育研究においては、リーディング研究（甲原・セネック, 2017；高橋, 2015；加野・ゴーベル，2012；牧，2019）やライティング研究（Tashima，2018）も見受けられたが、その多くはクラス単位のデータ収集であり、規模は小さく、その研究範囲も大きくはない。

その他、初年次の学習を支援するためのオンライン授業（大門ら，2021）やe-learningを取り入れた研究もなされていた。特に、宇佐美（2017）では、英語学習支援に加え、e-learningを学生の英語学習に取り入れることによって、学習者の自律が期待できると結論づけている。また、谷口ら（2020）では初年次英語で用いられる教科書作成にあたり、テキストやタスク分析を行っている。鈴木ら（2016）は英語教員養成課程の初年次カリキュラムを検証している。

5.3　英語初年次教育の課題とはどのようなものなのか

一点、大きな課題は、初年次教育に関しての研究は実は多くあるのだが、英語教育分野に至っては、かなり限定されていることが明らかになった。その研究分野は語彙、英語技能、英語能力、学習者要因に関するものであるが、実際にその数は多くはなく、研究デザインもアンケート調査やテストの結果を示したものが大半であった。一方、千葉（2016）では、ラーニングコモンズ内にある学習支援施設内での英語学習支援に関してインタビュー調査を行い、初年次英語教育支援の様子が示されていた。

英語の語彙指導、プレイスメントテスト分析に関する初年次英語教育研究のほか、大城（2012）では筆記小テストの結果を分析対象にして初年次英語教育における文法習得について分析を行っている。結果、

学習者の人称代名詞、三人称単数動詞といった文法項目の理解は向上していることが分かった。さらにTashima（2018）では、コーパスに基づくライティングの特徴分析を行っている。TOEFL Bridgeのライティング模範エッセーと初年次学習での英語学習者のライティングの特徴を分析し、日本人特有の課題を整理し、ライティング指導への教育的示唆を記述している。

実際に、初年次英語教育分野の調査は限定されていることもあり、今後さらに本分野に関しては多くの議論と課題があることが分かった。具体的には、どのような目的で、どのような目標を掲げ、大学初年次の英語教育カリキュラムを構築するのか、その評価はどうするのかというのは今後も議論が必要である。

6. 結論

本稿では、大学初年次における英語教育のシステマティックレビューを行った。実際、初年次英語教育に関する課題を探って本研究を始めたが、大学初年次英語教育の研究分野は想像していたよりも限定的であった。その為、本稿では、システマティックレビューの対象となる分野を初年次英語教育という枠組みにして検証を試みた。その結果、質的分析を含む研究はかなり限定的であり、今後さらに進められる必要があるということや、専門教育分野と初年次教育との関連で、特に語彙学習の強化に関する研究が見受けられた。

今後、初年次英語教育分野は、どのように高大連携を図るのか。二年次以降、さらには専門教育とどう繋げるのかといったような継続的なカリキュラムの一部として位置づけられるであろうし、その重要性は今も、そして今後も高く、大学の教育の内容と質の向上には必要不可欠な研究分野と考えられる。その為には、教員間の協働、職員と教員の協働が今後も必要である。

今後の教育的示唆としては、先行している高大連携のプログラムの教育効果の評価、そして大学初年次の英語教育の教育効果評価をどのような形で行うのか議論を進めなくてはならない。さらに、高大連携におけるカリキュラム、そして大学の英語教育カリキュラムの実施とその評価を学内（教職員間）で共有し、教育実践場面での改善を図る為の学内の強いネットワークシステムが重要であると考える。

謝辞

本論文を投稿するにあたっては、紀要の査読課程でご指導いただきました先生方、編集作業でご支援を頂きました先生方に心から感謝いたします。また、研究支援課の職員の皆さまにもご支援を頂きましたこと、厚く感謝申し上げます。

参考文献

石川有香（2016）.「大学教科書分析を踏まえた初年次学生用工学系ESP語彙表の作成の試み（実証研究，第41回全国英語教育学会熊本研究大会）」『中部地区英語教育学会紀要』. 45，305-312.

稲冨百合子，松宮新吾（2022）.「基盤教育機構外国語科目のカリキュラム改編に伴う教育効果の検証について（初年次報告）－授業展開事例と「OIDAI 英語力診断テスト」の実施検証－」『基盤教育論集；Bulletin of Institute of Liberal Arts, Otemon Gakuin University』. 9，185-205.

井上加寿子（2012）.「大学適応度から見る学習成果 : 初年次英語プレースメントテストと適応調査に関する分析」『教育総合研究叢書』. 5，89-102.

宇佐美彰規（2017）.「自律学習eラーニングの英語学習と学習習慣に関する調査」『武庫川女子大学情報教育研究センター紀要』. 25，4-7.

大城明子（2012）.「大学初年次基礎英語クラスにおける筆記小テストについて」『沖縄国際大学外国語研究』. 15，（1），35-54.

岡村光浩，ラッダ政美（2018）.「神戸芸術工科大学における英語学習意欲向上の試み／英語セミナーその他のアクティブラーニングが学生に与える効果についての一考察」『芸術工学2018』. 1-8.

加野まきみ，ゴーベル・ピーター（2012）.「RWL（聞きながら読む）学習法の有効性について : 京都産業大学文化学部初年次英語教育におけるプログラム実施とその効果」『京都産業大学総合学術研究所所報』. 7，1-11.

河川合之（2016）.「大学における初年次教育の現状と課題」『人間生活文化研究』. 26，232-238.
甲原定房，セネック・アンドリュー（2017）.「大学初年次英語授業におけるリーディング・サークルへの評価，他の諸変数と英語能力の伸び」『山口県立大学学術情報』. 10，131-139.
小堀馨子（2020）.「大学初年次教育における英語eラーニング『ぎゅっとe』導入の報告」『帝京科学大学総合教育センター紀要 総合学術研究＝Bulletin of Center for Fundamental Education Teikyo University of Science』. 3，95-104.
清水明子（2013）.「英語と他言語の学習における初年次学生の動機づけ : パイロットスタディー」『共立女子大学家政学部紀要』. 59，27-34.
城下彰宏，片岡裕貴（2021）.「メタアナリシスの統計解析手法」*Jpn J Psychosom Med 心身医*. 61，694-700.
杉谷祐美子（2008）.「初年次教育『第2ステージ』へ　―実践と結びついた研究への期待―」
https://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/329.html　(2022年8月10日閲覧)
鈴木彩子，工藤洋路，日墓滋之，松本博文（2016）.「英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーの研究とCan-doリスト作成の試み―初年次報告―」『論叢：玉川大学文学部紀要』. 56，105-141.
高橋留美，高橋寛，大野真機，小倉浩，吉川裕介（2020）.「医療系総合大学における医学英語教育について 初年次生に対する語彙教育を中心に」『昭和学士会雑誌』. 80，6，508-516.
高橋すみれ（2015）.「読み手リーダーから導き手リーダーへ（1）―「私たちの学び方」を模索する初年次英語リーディングクラス―」『日本福祉大学全学教育センター紀要』. 3，17-41.
大門正幸，今村洋美，西村智，和田珠実，加藤由崇，中島眞吾（2021）.「2020年度の全学英語教育に関する報告 ―オンライン授業への取り組み―」.『中部大学教育研究』. 21，13-20.
田中紀子（2012）.「1年次英語から2年次英語へ」『大手前大学CELL教育論集』. 3，29-39.
谷口茂謙，ハーディケン・ピーター，小池理恵，山田昌史（2020）.「常葉ブランドの英語教育構築に向けて：初年次全学共通教養科目『英語コミュニケーション』テキスト研究」についての報告.『常葉大学外国語学部紀要』. 36，157-179.
千葉美保子（2016）.「主体的な学びを促進するための学習支援構築に向けて : 学生へのヒアリング調査から」『高等教育フォーラム』. 6，97-102.
唐文涛，小島原典子，河合富士美，津谷喜一郎（2014）.「診療ガイドラインとシステマティック・レビュー」『薬理と治療』. 42，3，189-197.
日本私立大学協会附置私学高等教育研究所（2005）.「私立大学における一年次教育の実際」1-180.
長谷川由美（2016）.「〈Original Papers〉近畿大学生物理工学部新入生のプレースメントテストスコアの分析」『近畿大学生物理工学部紀要』. 38，21-34.
藤田哲也（2006）.「初年次教育の目的と実際」『リメディアル教育研究』. 1，1-9.
舟島なをみ（2007）.『質的研究への挑戦』. 第2版. 東京：医学書院.
牧恵子（2019）.「英語多読方法の調査と日本語多読への応用―大学初年次教育における新たな「読書シート」の開発のために―」『愛知教育大学大学院国語研究』. 27，29-48.
松宮新吾（2019）.「追手門学院大学国際教養学科の初年次生を対象とした英語学習実態調査 : 新カリキュラムの評価を目的として」『英語文化学会論集』. 28，1-27.
山田礼子（2012）.「大学の機能分化と初年次教育：新入生像をてがかりに（特集「大学」の機能分化と大卒労働市場との接続）」.『日本労働研究雑誌』. 54，12，31-43
横山悟（2015）.「大学における初年次英語教育の効果に関する多角的分析」『千葉科学大学紀要』. 8，17-21.
横山悟（2016）.「入学試験区分による経時的データに基づいた大学初年次学生の英語力の分析」『千葉科学大学紀要』. 9，9-16.
和田珠実（2019）.「大学入学時における英語力と英語自己効力感がその後の学習効果と効力感に及ぼす影響」.『中部地区英語教育学会紀要』. 48，81-88.
渡邊席子（2007）.「日本の大学における初年次教育に関する質問紙調査研究」『大学教育』. 5，1，47-63.
渡辺雄一（2013）.「ラッシュモデルを使ったテスト等化―プレースメントテストに見る入学時英語力の推移」『保健科学研究誌』. 10，71-76.
Al, M., & Wafaa, S. (2022). Experiential writing through connectivism learning theory: a case study of English language students in Oman higher education. *Reflective Practice*. 23 (3), 305-318.
Everett, B., Salamonson, Y., Trajkovski, S., & Fernandez, R. (2013). Demographic and academic-related differences between standard-entry and graduate-entry nursing students: a prospective correlational survey. *Nurse Educ Today*. 33 (7). 709-713.
Fernandez, R., Read, J., & Dang, T. N. Y. (2022). Measuring depth of academic vocabulary knowledge. *Language Teaching Research*. Retrieved August 10, 2022, from
https://doi.org/10.1177/13621688221105913
Tashima, Y. (2018). Problems in freshman English writing: Six features of ESL compositions. *The journal of Tokiwanomori*. 5. 1-15.
The PRISMA Group (2009). *Preferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta-Analyses: The PRISMA Statement*. PLoS Med 6 (6) Retrieved August 10, 2022, from
https://doi.org/10.1371/journal.pmed.1000097

辻　るりこ（和洋女子大学 全学教育センター 助教）

（2022年11月15日受理）